



市整会

会報

大阪市立大学整形外科開業医会

No.72 2024年1月1日発行

医療法人 孝瑛会
西沢整形外科クリニック
〒599-8114 堺市東区日置荘西町1-15-23
TEL072-288-2001 FAX072-288-2002

巻頭言

市整会 会長 西澤 徹 (昭和62年入局)

中国武漢発祥のコロナウイルス禍は日本人の心にも身体にも大きな傷痕を残しました。

マスク姿のドライバーや幼児を見ると哀しみとともに憐れすら感じます。

市整会もそれを免れなかったようです。心が後ろ向きになったというよりは、抑えていた心の内面が解き放たれたのかもしれない。

学術研究会、文化講演会、家族会とパンデミックを境に軒並み参加者が激減しています。

長年市整会を支えてこられた先生方のセミリタイアの時期と、ちょうど重なったのかもしれませんが。また若い世代では、集団で楽しんだり研鑽したりという文化そのものが、日本から廃れてきたのだとも感じます。

市整会の多極化ですね。会長を拝命して3年半、いろいろな指向をもつ会員の最大公約数を探ってきましたが、未だに掴みあぐねております。

また組織への帰属意識も薄くなってきたこともあるでしょう。医師の世界は縦社会の典型と感じておりましたが、今はそうでもないようです。同門会の退会者が散見される時代です。「滅私奉公」はもはや死語であります。

そうなれば、市整会は少なくとも二極に合わせた組織とならねばなりません。

いい時代に生まれ、遠くない将来に去り行く老兵と、希望の見えない国に育ち、若いうちから一生を見据え生きている彼らと。

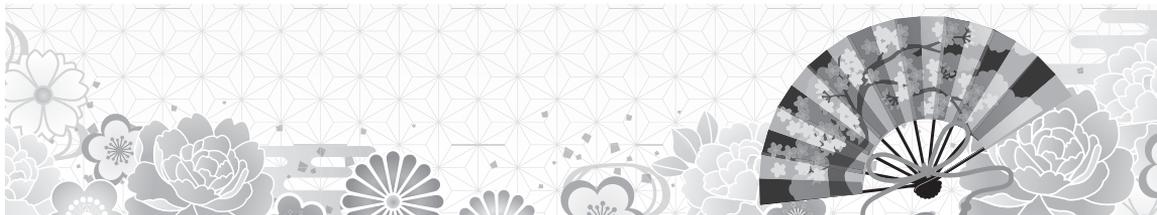
今後益々困難を極めるであろう診療所経営を想うと、得になると思えない会務を誰が嬉々として手伝いましょうか。八方に拡げていたウイングをたたみ、ITを駆使して省力化を図らねばなりません。

そのためには、市整会のあり方のコペルニクスの転換と破壊的改革が必須です。当然多くの痛みを伴うことになります。

多極化は時代の趨勢と諦めますが、分断に進むことがないよう、会員諸氏におかれましては、市整会の存在意義を改めて噛みしめたくうえで、ご覚悟いただきたいと思うのであります。

自分の開業医人生のために、市整会を利用し、会の破壊的改革に協力してやろうという諸君の出現を熱望しております。

「狂を發する日本人」を私は今も信じます。



令和5年度 学術集会の記録

R5.03.11 (土) 学術講演会 シティプラザ大阪
共催：久光製薬

【参加者】30名 (演者含む) (市整会会員21名、
同門3名、非会員6名)

学術講演：

「整形外科領域における医工連携の試みとおさえておきたい運動器疼痛診療のポイント」

座長：小竹志郎

演者：大阪公立大学大学院医学研究科

整形外科学・総合医学教育学 准教授

豊田宏光先生

本講演では、演者がこれまでに携わってきた基礎研究から現在取り組んでいる医工連携の試み、具体的には、低温大気圧プラズマ技術を応用した骨を中心とした運動器再生医療に関する研究成果についてご紹介いたします。

我が国の医療機器産業は輸入超過であり、国際競争力を持つ先端医療機器の研究開発、医療の分野におけるイノベーションの創出は重要課題となっています。イノベーションの創出には異業種との対話や連携が不可欠とされ、ご縁があって工学研究科電子物理工学分野の教室と共同研究を行う機会を得ました。工学部の専門領域は、プラズマ応用化学、低温大気圧プラズマでした。

プラズマとは活性粒子（電子、イオン、分子、ラジカル、光）の集合体であり、個体、液体、気体に続く第4の形態と言われています。従来プラズマという電子や電子を失った分子（イオン）を発生させるには、超低圧環境下の気体に高エネルギーを発生させることが必要とされてきましたが、近年は低温大気圧下に安定したプラズマを生成することができるようになりました。この技術革新は、産業界のみならず農業や医療業界においてもその活用が期待されるようになり、医療分野では医療材料の表面改質、滅菌技術、創傷治療、がん治療に関する研究が行われるようになってきています。

一方で、骨や腱などの運動器再生医療の分野に

おいて低温大気圧プラズマを応用した基礎・臨床研究はほとんど行われていませんでした。そこで、大学院生らとともに、手探りですが、低温大気圧プラズマを用いた運動器再生医療の研究を始めました。本講演では、プラズマ生成の基礎、これまでの報告、我々が世界に先駆けて行った骨再生医療への応用例についてご紹介いたします。

また、最後にセッションでは、最近使用可能となりましたジクロフェナク全身作用型貼付剤の特徴と適応について私見を交えてお話いたします。

学術講演：

「整形外科外来におけるフットケア・足病診療

座長：増田博

演者：南和広域医療企業団 五條病院

整形外科部長 門野邦彦先生

いつのころからか「フットケア」「足病」という用語が使われるようになった。この用語の理論だと、医学は「人病」であるし、「ヒューマンケア」ということになり特定の医療の分野を意味していないともとれる。しかし実際のところ、フットケアとは「糖尿病足病変に対する予防的な介入」として、足病とは「糖尿病足病変などの中の重症の切断のリスクが高い状態」、といった意味で用いられることが多い。今回、そこに至った経緯を検討してみた。欧米では数百年前から、人々の足を専門にみる職業があり、現代に受け継がれている。米国ではPodiatrist（足病医）と呼ばれ、医師、歯科医師と同等の人々を治療する国家資格となっている。米国では、1950年ごろから、MGH、Mayo clinicといった名だたる病院の糖尿病科に「足病外来」が続々と開設され、足病医が病院内に加わり、糖尿病内科医とタッグをくんで、糖尿病患者の足病変に対する診療を行うようになった。そこでは、足の変形や胼胝に対する処置、靴や装具の処方、創傷や潰瘍の治療、手術、再発予防のための定期ケアといったことが行われ、糖尿病患者における足の切断の減少、生命予後の改善といった効果を上げていった。これらを

学んだ日本の糖尿病内科医らが、1970年ごろから日本にフットケアを紹介し、広まっていったと考えられた。これが、フットケア、足病が主として糖尿病足病変を対象とするものと浸透していった理由であろうと推測された。その後、日本フットケア学会、日本下肢救済・足病学会の設立、合併を経て、日本フットケア・足病医学会という巨大な組織へと発展している。ただし、「ケア」という用語が治療よりも看護行為よりの内容をイメージさせるためか、看護師が多く、医師以外の積極性と活動がめだっており、医師からの注目は高くはないとも感じている。本学会のなしてきてきた実績の一つとして、これまで我が国においてなじみがなく、医療制度上に存在しなかった、フットケア、足病診療といったものを広め、いくつもの診療報酬点数を獲得してきたことが挙げられる。これらは保健医療制度そのものを変化させたと言える。現状、フットケア・足病診療の分野に関わる整形外科医および足の外科医は少ない。しかし、足と足関節の疾患を専門とする我々にとって、もはや「ケア」だから医師の業務ではない、糖尿病は内科の疾患、といった認識はそぐわなくなっていると感じている。糖尿病足病変は患者数が多く、重症化すると壊死や切断に至るリスクが高く、フットケアの重要な対象であることに異論はないが、Podiatristの対象は、糖尿病だけではない。足病医の治療対象は、「学校における子どもの足」「産業現場における大人の足」「介護施設における高齢者の足」「糖尿病足」であるとする記述もあり、このような状況は、我が国における整形外科、足の外科医にとっては、まさしく日々診療でおこなっていることそのものだと感じる。日本においては、整形「外科」医といいながら、その診療内容の多くは保存治療である。とくに開業の医師においてはその傾向が高いものと思われる。日本の足の外科医も、海外の足病診療、フットケアに学ぶ点は少なくないと感じており、それらに学ぶことで、我々の診療を向上させ、患者や社会への貢献を高めていけると考える。

R5.05.27 (土) 市整会 総会

講演会のみ共催：科研製薬

会場：TKPガーデンシティPREMIUM心斎橋 カンファレンスルーム3B

参加者 23人、委任状 94人、名誉理事の先生 32人…合計149名で総会成立

総会開始：16：00～ アルツ製品紹介：17：00～17：15 特別講演：17：30～18：10

講演：

「骨髄液注入腱を用いた半月板再建術の開発」

座長：宮内晃

演者：大阪公立大学大学院医学研究科

整形外科学 飯田健先生

【はじめに】半月板全切除/垂全切除後には、関節症性変化が高頻度に出現する。半月板の置換手段として本邦では自家腱による移植手術が行われているが、本来の半月板組織とは異なりその成績は一定でなく、軟骨の保護作用も報告は少ない。

【目的】本研究の目的は、治癒促進分化を期待し骨髄液注入腱を用い半月板再建術を施行し、その有効性を検証することである。

【方法】ラビットの内側半月板を全切除し、半腱様筋腱に骨髄液を注入し自家腱を用いた半月板再建モデル（骨髄液群）、自家腱のみを用いた半月板再建モデル（再建群）、半月板再建を施行しないモデル（切除群）を作製する。術後4週、12週、24週時に犠牲死、半月板を採取し、組織切片の組織学的解析、力学的解析を用い評価する。また、大腿骨、脛骨の関節軟骨を採取し、組織学的解析を用い評価する。

【結果】再建半月板の被覆率、および再建半月板の組織学的評価：Modified Pauli's scoreは術後12週、24週時に骨髄液群で有意に高かった。また、骨髄液群において、safranin O染色、免疫染色（2型コラーゲン）の染色性が強かった。半月板の弾性率を評価した力学的解析では、骨髄液群、再建群間で有意差は認めなかった。軟骨のマクロ評価：ICRS、および組織学的評価：Mankin scoreは、大腿骨側において切除群と比較し、再建群、骨髄液群で有意に低く、脛骨側においては、骨髄液群で有意に低く、軟骨保護作用を認めた。

【考察および結論】 Johnsonらは自家半腱様筋腱を使用した半月板移植術を報告したが、その成績は不良であった。さらに、Kohnらは、大腿四頭筋腱による再建術は臨床的に推奨できないと報告し、自家腱のみの半月板移植術には限界があることが示唆された。骨髄液注入腱を用い半月板再建術が半月板再建方法として応用できれば、半月板切除後の変形性膝関節症に対する治療法の選択肢となり得ると考える。

R5.6.10 (土) 学術講演会 (共催：旭化成ファーマー) 16：00～

ANAクラウンプラザホテル大阪 4階平安 (大阪市北区堂島浜1-3-1 TEL：06-6347-1112)

参加者65 (演者3名含む)：市整会会員32名、同門会10名 (演者1名含む)、非会員23名 (演者2名含む)

学術講演Ⅰ

『上肢疾患に対する低侵襲治療—鏡視下手術を中心に—』

座長：恵木丈先生

演者：大阪公立大学大学院医学研究科

整形外科学 准教授 岡田充弘先生

整形外科の外来診療で、上肢の痛みやしびれを愁訴に来院する症例は多い。治療には診断が重要であることはいうまでもないが、診断が下された後、どのような治療を選択するか判断することも重要である。

近年、様々なアクティビティへ参加している高齢者が増えており、幅広い年齢層で活動性が高まっている。このような状況下において、早期の職業や趣味への復帰が可能な治療を希望する患者が増加している。早期復帰を実現するためには、従来の治療と同成績を得ることができ、且つ低侵襲な治療が望ましい。この解決策のひとつとして、鏡視下手術が挙げられる。数カ所の小皮切で、従来の手術で損傷していた筋・筋膜等を温存することで、術後の疼痛や機能障害の発生を抑制できる。本講演では、演者が鏡視下手術を行っている上腕骨外側上顆炎・手根管症候群・母指cm関節症・バネ指について述べる。

上腕骨外側上顆炎では病的な関節包や短橈側手根伸筋の切除、手根管症候群では横手根靭帯の切除による正中神経への除圧、母指cm関節症では大菱形骨部分切除術、バネ指では腱鞘切開術を鏡視下手術で行っている。それぞれの術式の利点について、動画を用いて解説を行う。

また、講演では手術のみではなく、それぞれの疾患について、日常の診療に役に立つ最新の知見についてもとりあげさせていただきます。

学術講演Ⅱ

『リウマチ足変形の治療オプション：疼痛・感染対策から機能再建まで』

座長：竹中稔幸先生

演者：大阪南医療センター

骨・運動器疾患センター部長 平尾眞先生

関節リウマチ (RA) の薬物治療の発展とともにこの長寿時代にRA患者がより正常な二足歩行を再獲得できるように下肢機能再建手術の技術を整形外科としては提供したい。脊椎外科治療、股関節や膝関節の人工関節手術・再建手術の技術の進歩や成績向上をみる中で、最終的に地面と接する足部の問題が残存していれば総合的に正常な二足歩行を再獲得できたことにはならないためRAのマネジメントを行っている早期から足部の問題に着目して保存加療も行い、必要な外科的処置を適切な段階で行えるような心構えや連携システムの構築が重要である。外科的処置の段階になると、足部を構成する、後-中-前足部全ての変形・破壊に対して総合的に対処できなければならない。具体的に、距腿関節の問題に対して人工足関節置換術 (TAA) は今後もっと適応が広がっていくべき術式である。他の隣接関節 (距胫下関節、距舟関節、踵立方関節など) が残念ながら部分的に矯正・固定を余儀なくされ固定関節分の負担が増えた状況でも距腿関節の可動域を温存することができるよう、耐久性も兼ね備えた人工足関節置換の技術を取得することは重要である。距腿関節の可動域がある程度温存されると、歩行中の立脚期において後-中-前足部に荷重伝達が起り前足部への荷重と踏み返し運動が可能になる。しかしこの状況下で縦アーチが消失していたり、前足部の外反母趾や三角変形があるとまともな立脚

期を迎えることが出来ない。そのため、中後足部においてアーチの再獲得・内外がえし変形を矯正し、前足部においては有痛性胼胝を取り除くべく横アーチを形成し母趾荷重伝達システムを再獲得することが重要である。これらを念頭に置きながらRA患者の歩行能力の維持・向上に努めていくために日々症例より学んでいるのが現状である。

学術講演Ⅲ

『骨粗鬆症の薬物治療—骨形成促進薬の適応と効果を中心に—』

座長：梶史明先生

演者：慶友整形外科病院 骨関節疾患センター
センター長 岩本潤先生

骨粗鬆症に対しては、ビスホスホネート（BP）が最も広く、よく使われている。BPは骨内半減期が長いため残存効果があり、長期使用では有害事象予防のため、休薬が検討される。デノスマブにも、BPと同等の骨折抑制効果がある。ただし、最終投与後7ヵ月から骨密度減少がみられ（投与中止すると）、多発性椎体骨折のリスクが増加するため、投与中止後はBPに切り替えることが重要である。骨形成促進薬として、テリパラチド、アバロパラチド、ロモゾブマブがあるが骨折危険性の高い骨粗鬆症に適応がある。骨吸収抑制薬よりも、骨密度増加や骨折抑制効果が大きいものの、使用期間が限られている。その効果を維持・増進するため、骨吸収抑制薬への逐次療法を行う。骨形成促進薬の選択に当たっては、投与禁忌（添付文書）、副作用、注射方法（来院注射か連日・週2回の自己注射）、アドヒアランス、骨密度増加効果、骨構造改善効果、新陳代謝への影響、疼痛・QOL改善効果、骨癒合促進効果などを考慮に入れて行われる。

R5.09.09（土）令和5年度前期理事会・市整会フォーラム 講演会のみ共催：帝人ファーマ
TKPガーデンシティ心齋橋南船場
16：00～ 理事会、17：00～ フォーラム
理事総数62名、参加予定者18名、委任状16通、名誉理事からの委任13通；合計47通…理事会成立

演題

『腰曲がりと骨粗鬆症性椎体骨折—大公大脊椎臨床研究を含めた話題提供—』

座長：小竹志郎

演者：大阪市立総合医療センター 整形外科・側弯症センター 副部長 星野雅俊先生

人生100年時代の到来で、高齢者健康寿命の延伸は社会にとって重要課題であり、我々整形外科医の担う役割は益々大きいものとなっております。骨粗鬆症性椎体骨折（以下OVF：Osteoporotic Vertebral Fracture）は最も頻度の高い脆弱性骨折であり、本邦の前向き疫学調査によると年間発生数は420万人と推計され、OVF診療成績の向上は喫緊の課題であります。また、近年の様々な臨床研究の結果、腰曲がり（脊柱後弯症）は高齢者のQOL/ADLに最も影響のある病態の一つであることが解明されました。脊椎外科領域では理想的なX線パラメーターの目標値が設定され長範囲矯正固定術が盛んに行われておりますが、高率な合併症と高額な医療コストが大きな問題になっております。我が大阪公立大学脊椎班は、OVFと腰曲がりに対してBKPに代表される低侵襲手術や長範囲矯正固定術など脊椎手術治療の発展に注力すると同時に、疫学的研究を通じた病因病態の解明や介入研究を通じた予防方法の確立を目指してきました。

本講演では、我々の取り組んできた腰曲がりとOVF・体幹筋・腰痛との因果の解明を目指した白庭研究をはじめとする各種疫学的研究や、大公大が研究事務局（寺井、高橋、星野、谷脇）を務めている腰曲がり症状の改善・予防を目指した日本脊椎脊髄病学会プロジェクト研究の結果を紹介し、今後の臨床研究のあり方も提示したいと思います。加えて、Anabolic作用を有する新規骨粗鬆症治療剤であるアバロパラチドの特長などOVF診療の最新の話題を提供させていただきます。

R5.11.04 (土) 文化講演会 オーピック御堂筋ビル2階 16:15~
参加者43名(会員25名、同門5名、非会員(演者を含む)10名、御家族3名)

文化講演

『不肖・宮嶋 我がカメラマン人生に一片の悔い無し～写真から祖国日本を考える～』

座長：西澤徹

演者：報道カメラマン(戦争カメラマン)

宮嶋茂樹先生

(<https://fushou-miyajima.com/>)

文化講演会雑感

～これって市整会の真髓？～

市整会会長 西澤徹

昨年に続き、11月4日市整会文化講演会を開催しました。

連休の谷間ではありましたが、まずまずの出席者を得てほっとしております。

会長職を得て4年目、はっきり申し上げてこの職務に歓びを見出すことはほとんどありません。胃が痛み、頭髪の後退に拍車がかかるだけです。唯一と言っていい楽しみが文化講演会の演者選定でしょうか。再開した昨年も今年も私の独断です。

宮嶋茂樹さんの講演はあまり抄録になじまないものでしたので、私の雑感で代わりとすることをお許しください。氏は著作も多く、著作権云々もよくはわからないので、抄録を求めることはせず、会報に掲載する必要もなからうと判断しておりました。

宮嶋茂樹といえば「不肖・宮嶋」ですね。

以前市整会の講演にお呼びした勝谷誠彦さんが「不肖・宮嶋」の名付け親だとあちこちで書かれています。当日ご本人に何うと、そうではないというニュアンスでした。まあそこは大人の対応で「彼も一役買っている」ということでした。その勝谷さんもこの11月で、没後5年。ウクライナ戦争が始まり、宮嶋さんが現地へ何度も飛んでいたのを知っていたので、因縁浅からぬ彼にリアルな戦争を語っていただくと考えました。さすがに昨年は、講演当日日本にいる確定がないので、オ

ファーはしませんでした。

私は今でも勝谷さんの元マネージャーとFBでつながっていきまして、彼が宮嶋さんの戦地報告会を企画したことを知り、連絡先を教えてください講演依頼したのでした。

私の講師招請は、基本著作を読んで決めます。書き記したものの重みを重視します。命がけで現地の写真を記録し雑誌へ売り、帰国後そのルポを書き著すのが氏のスタイルかと考えます。

朴訥とした氏の語りは、心を大きく揺さぶられることが少なかったかもしれません。逆に修羅場をくぐった者だけが発する本物感を感じるわけですが。

あれこれ著作を読んだ私は、スライドと文章が脳内でリンクして非常に楽しめました。

今からでも遅くないので、ぜひ彼の著作を手にとってください。日本のリアルを少しは感じていただけるのではないのでしょうか。また文章が電車で読めないほど面白いと断言します。愛ある悪口に膝を打ちます。

写真集は鮮度が大事と見えて、絶版となるものもあり、残念であります。

会の後、恒例となりつつある「美々卯」での会食。店のお姉さんのノリの良さもあって、話ははずみ、アルコールが進みました。会食代をはるかに超える価値のあるものであったと自負します。文化講演の真髓はここにこそあるのかもしれない。すみません。

週明け、東京での「硫黄島と国後島」の写真展の案内が届きました。

「義を見てせざるは勇なきなり」

日帰りで東京へ下り、作品とひとつひとつ面白いキャプションを鑑賞し、たまたまおられた氏と歓談してまいりました。

靖国など都心を徘徊し、銀座で飯を食い、砂上の楼閣の平和を楽しむ人々に和むひと時を過ごしました。

来年も私の読書遍歴から演者を選ぶことになるのでしょうか。

この方を是非！とあれば遠慮なく推してください。

特別公演

『肩肘疾患治療の現状 ～専門医への連携のタイミング～』

座長：増田博

演者：清恵会病院 整形外科部長

スポーツ関節鏡センター長 松浦健司先生

当院ではこれまで年間約150件の肩・肘外傷、障害疾患の紹介を頂いた。そのなかで『四十肩・五十肩』と総称される老化を基盤とした肩痛、可動域制限を主訴とする中高年層が多数を占める。

『凍結肩』と呼ばれようになった狭義の肩関節周囲炎（肩関節性動症）や腱板損傷・断裂、インピンジメント症候群も含まれその診断、除痛処置を

含めた保存治療方法の選択、手術治療介入のタイミング、手術方法選択など判断に苦慮されることも多い。近年、反転型人工肩関節置換術（RSA）の導入により上腕骨近位端骨折や骨折後後遺障害による機能障害についてもその治療方針が大きくかわってきた印象がある。

肘関節疾患に関しては、保存治療が奏功する野球肘のなかで早期に手術介入を検討することもある上腕骨小頭離断性骨軟骨炎や中高年層にみられる難治性テニス肘、変形性関節症などが多い。

今回の講演では当院が得意とする肩・肘関節疾患に対する治療の現状を、とりわけ専門医に紹介する至適タイミングについてもお話ししたい。



会員各位

本会報に掲載される、豊川英樹先生の「ワクチン接種奮闘記」は本来であれば、市整会50周年記念誌に掲載されるべき原稿でした。

ここで私共は印刷業者さんとの原稿の受け渡しを落とすという、痛恨の過ちを犯しました。

ダブルセーフを省くことを良しとした、すべて私の判断ミスの結果であります。

豊川先生には大変失礼で申し訳ないことをしました。

到底記念誌のかわりにはならないことを承知しておりますが、豊川先生にご了承をいただき、ここに原稿を掲載するものであります。

会員の皆様にも、不完全な記念誌を作成しましたことを、心よりお詫び申し上げます。

ぜひ今号の会報は、記念誌とともに保存していただきますようお願い申し上げます。

誠に申し訳ありませんでした。

市整会 会長 西澤 徹



ワクチン接種奮闘記

豊川整形外科 豊川 英樹（平成元年入局）

「1万人超えたよ」妻の一言に「凄っ！」と心の中で叫んだ。当院での新型コロナワクチンの接種者延べ人数である。全てのきっかけは友人Sからのメールであった。

「N先生がワクチンの予約ができなくて困っている」私とSの高3時代のクラス担任だったN先生は、当院のお近くにお住まいで、腰痛、膝痛で度々受診される。コロナ禍の前は、N先生を囲んで同期生20人ほどで忘年会をするのが恒例であった。Sはその幹事であり、日ごろからN先生とは連絡を取り合っている。

「かかりつけの内科でワクチン予約が取れない」N先生が困っているということは、他の患者さんの多くも同様なのだろう。当初、ワクチン業務は内科系の先生方が中心にされるのではないかと誤解し、自院での接種にためらっていた私だが、Sからのメールを受け、即座に決断した。「よし、やろう」大変なことになることをその時は想像出来なかった。

当初、窓口での予約のみで対応したが、毎朝予約希望の人で外まで溢れかえった。問い合わせ電話が連日100本以上かかった。妻が予約、電話対応に大活躍してくれた。接種開始2日目受付スタッフが「対応できません」と涙した。診療中のみでは追い付かないと判断し、昼休み、土曜の午後も接種した。ドタキャンが出れば、キャンセル待ちの方を呼び出し一人分も破棄せぬよう心掛けた。接種人数は、平日なら1日100人以上、多い時には150人を超えた。

当院は大阪狭山市と堺市の境にあり、堺市からの患者さんも多い。途中でF社製ワクチンが品薄

になり、「接種は大阪狭山市民のみでお願いします」と保健所から厳しく注意されたが、当初は住所無関係に接種した。大阪市内や奈良県など遠方からも接種に来られた。

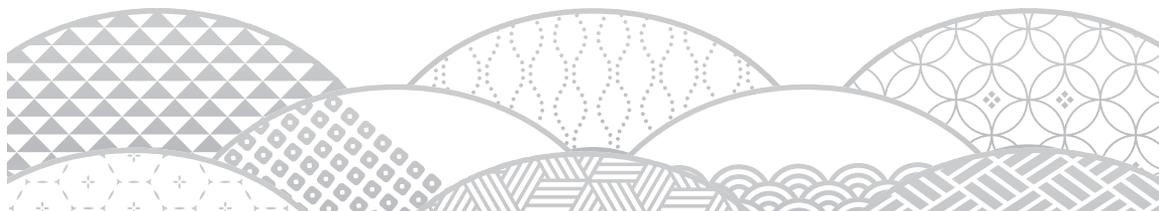
専門家たちはコロナの収束に数年かかると予想した。「そんなに長くかかるかなあ？」と思っていたら彼らの予想は的中した。接種は3回目4回目と長期間に及んでいる。

今月のF社製ワクチンの供給は11本のみであったが、月初めに予約いっぱいとなり、その後は不人気のM社製のみを使用。接種人数は1桁になった。「これでワクチン業務も終わりかな？」と思ったら、今週からオミクロン株対応ワクチンの接種が始まり接種者が再度増加している。すべて終了となるのは年越しになるようである。

1回目2回目接種の激務を思い返すと夢のような。接種券や予診票の確認が大変だった受付スタッフと妻。昼休み返上でワクチンの準備してくれた看護師さん。「こちらで15分休憩してください」と手伝ってくれたリハビリスタッフ。本当に感謝感謝である。

来年「リスクゼロ」となり、皆がマスクをしなくなったらスタッフとの宴会を早速企画したい。それが忘年会ではなく、ビアガーデンであってほしい。いや、花見酒もいいなあ。

追記 令和5年12月。7回目のワクチン接種は、日に数人程度となった。来週はスタッフとの久々の飲み会である。多くのことを思い知らされたパンデミックであった。



令和5年度市整会家族会を企画して

福利厚生担当 大川得太郎（昭和62年入局）

市整会家族会は、コロナ禍で延び延びになり、やっと4年目に開催されました。4年前の予定では、京都の南禅寺観光の予定でしたが、京都の観光がコロナ禍開けの影響で、爆発しており観光が困難と判断して、和歌山旅行に変更しました。今回は、お天気にも恵まれ、暑いくらいでした。ただ、前日には、雨風が強く、一時あられが降り、次の日の開催が危ぶまれましたが、回復して良かったです。例年と比べて今年は暖かく、紅葉が遅れており、和歌山城の紅葉は5分くらいで少し残念でした。しかし、テレビによると、京都観光は

大変なことになっていました。紅葉の名所は200メートル以上の行列が続いており、人の山だそうで、和歌山にして良かったです。参加者は会員17名、ご家族17名の合計34名でした。和歌山城は非常に空いていて、ゆっくり観光できて良かったです。実は、これもコロナ禍の影響でバスガイドさんが不足し、また高齢化しており、今回はバスガイドさん無しで観光を行いました。私が、緑の旗を持ち、先導して所要所で説明して行きました。プロではないので、段取りが悪かったかも知れませんが、市整会のみなさまが暖かく見守って



くれてホッとしました。和歌山城の観光は南の岡口門より入場し、大手門、伏虎像、御橋廊下、紅葉渓庭園を散策しました。今回の目玉は、和歌山城ホール展望台よりの眺望でした。皆様が喜んでくださり、嬉しかったです。

昼食の「四季の味ちひろ」も、皆さんの近況を拝聴しながらの楽しい雰囲気、親睦が図れたものと思います。ただ、一番印象に残ったのは、日下先生のお言葉です。先生は、今年60才になりましたが、今回参加した会員で最年少でした。これは、由々しき事態です。市整会の一大イベントである家族会の参加者が、昭和入局の方ばかりになっております。平成以降の若手の参加がないと言うことは、大問題と考えます。おそらく昭和の私考している家族会と、平成以降の市整会会員の考している家族会に大きな隔たりがあるのかも知れません。次回もう少し興味のある企画にしないといけないと考えました。若手のアイデアを取り

入れたいと思います。市整会で若手を交えたLine等を作り、日頃若手と交わる機会がないと、市整会及び家族会は生まれ変わらないと思います。少し、気分が落ち込みましたが、現実を受け止めなくてはなりません。

ただ、参加された皆さんは、非常に楽しんで頂いているように感じました。食事後に訪れた、青木松風庵の月化粧ファクトリーで、皆さんが子供のようにはしゃいで写真を撮られているのに驚きました。また沢山買い物を楽しまれているようで良かったです。

今回も、楽しい日帰り旅行を無事終わることができ、ありがとうございました。今後の課題は沢山ありますが、来年こそは若手の参加を期待しております。是非、来年の市整会家族会を盛り上げてくださるようお願い致します。



富岡製糸場

黒田 晃司（昭和46年入局）

長年、富岡製糸場を訪ねたかった。それは私の祖父・廣治が大正の初め周桑製糸を造り神戸の生糸市場で活動していたことを叔母から聞いていたからです。大正13年の神戸新聞に記事が残っていることを従兄弟が調べてくれた。この従兄弟は元毎日新聞の記者で私より1歳年下。私と同じ年齢の従兄がいてこの3人は私が戦後疎開した北條村で兄弟のように高校生まで育った。



富岡製糸場入口

富岡製糸場の正門前に降り立つと、木造建築とは思えないレンガ造りの建物がすぐ目に飛び込んで来た。日本で初めてのレンガはこの建物を造るためフランス人が埼玉県深谷の瓦職人に教え、福志摩町に窯を築いて焼きました。レンガの壁・窓は鉄製の開き戸が規則正し造られ、グレー色に塗装され鉄製の窓を覆う鎧戸が、レンガの柿色とのコンビネーションが美しい。また工場内部も上の写真の通り白色に統一され、天井、構造材、窓枠の清潔感が良い。構造体が規則正しく並んでいる。このセンスの良さは感動的です。



工場内部

富岡に器械製糸場が建設された経緯について

明治政府に外国商人などから器製糸場建設の要



富岡製糸場1階は工場。2階は絹糸を湿気から守る



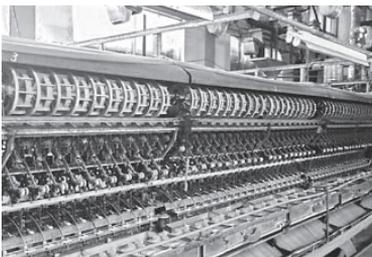
望が出されていて、エシュト・リリアンタル商会]から資金提供の申し出もあった。これがきっかけとなって器械製糸工場建設が実現した。政府内では「外国資本を入れず国策として器械製糸工場を建設することになった。1870年2月に器械製糸の官営模範工場建設が決定し、大隈重信、伊藤博文と渋沢栄一は官営の器械製糸場建設をフランス公使館に依頼した。その結果エシュト・リリアンタル商会横浜支店の生糸検査人ブリューナが作成した詳細な「見込み書」を明治政府に出され、その内容を吟味した上で、1870年（明治3年）6月に仮契約を結んだ。

ブリューナは仮契約後すぐに尾高惇忠（上の写真の人；岡部藩領の武蔵国榛沢郡下手計村に名主の尾高勝五郎保孝の子。惇忠は幼少時から学問に秀で、自宅に私塾の尾高塾を開いた。惇忠に教えを受けた一人が澁澤栄一です。惇忠の母・やへが栄一の父・渋沢市郎右衛門の姉で惇忠と栄一は従兄弟であった）を伴って長野県、群馬県、埼玉県などを視察し、製糸場建設予定地の選定を始める。そして明治3年10月7日（現在の太陽暦では1870年11月29日となる）に民部大輔らと正式な雇用契約を取り交わす。10月17日（1870年12月9日）に富岡を建設地とすることを決定した。この

決定は、

- 周辺で養蚕業がさかんで、繭の調達が可能であること
- 建設予定地周辺の土質が悪く農業には不向きな土地であること、
- 水や石炭などの製糸に必要な資源の調達が可能であること、
- 全町民が建設に同意したこと
- 元和年間に富岡を拓いた代官中野七蔵が代官屋敷の建設予定地として確保してあった土地が公有地として残されていて工場用地となった。

以上が考慮された結果でした。これは粗製濫造問題への対応というよりも従来の座繰りによる製糸では太さが揃わなかったために経糸（タテイト）よりも安価で取引される緯糸（ヨコイト）として使われることが多かった実態を踏まえ、その改良を志向したことが大きかったと言われている。同時に政府は器械製糸技術の導入を奨励して前橋藩では速水堅曹らが同じ年に藩営前橋製糸所を設立した。これは日本初の器械製糸工場です。イタリアで製糸業に従事した経験を持つスイス人ミユラーを雇い、イタリア式の製糸器械を導入した。当初は6人繰り、次いで12人繰りという小規模なものにとどまっていた。下の写真の機械は前橋藩では速水堅曹氏らが同年藩営前橋製糸所を設立したものだそうです。明治維新に日本初の器械製糸工場と見なされている。この時代にこんな機械を造る技術があったとは驚きです。イタリアで製糸業に従事した経験を持つスイス人ミユラーを雇い入れ、イタリア式の製糸器械を導入したと書いてありました。「ここは製糸をいかに効率よく機械を使用して実行するかという実験場で、その技術を日本国の製糸場に広げ、高品質の絹糸を生産する技術を向上させ「世界貿易のトップに立つ実験場」でした。明治維新に夢を抱いた日本人が世界一の製品を携えて立ち向かっていく姿が感じ取れました。私の祖父はいち早くその絹糸作る周桑紡績を建設したはずです。隣村に製糸工場を建設して女工



イタリア式の製糸器械



上の写真の建物は現在も残っている



ブリュナエンジンの復元機

さん用の学校を造った。そこが戦後女学校→新生の高校になり、私の姉達は1年だけここに通りその後校区の小松高校に

転校しました。話が脱線しましたが、私はこの富岡の工場が建設された明治維新の時代背景を忘れていました。それはまだ機械を動かす動力がモーターではなく蒸気機関だったことです。絹糸を繭から取り出す機械をまず作り、工場を建設したのでした。明治初期は丁度イギリスの産業革命の時代（一般的にイギリスの産業革命は1764年ハーグリーブズがジェニー紡績機を発明したころから、蒸気機関車の鉄道が各地に開通し始めた1830年代までとされている）の話なのです。ここ富岡製糸場は蒸気力・蒸気機関が最先端の技術だった時代に富岡製糸工場は造られましたので、蒸気が動力源でした。明治4年（1871年）から始まり、翌年の明治5年7月に主な建造物が完成し、10月4日に操業が開始されました。

明治元年は1868年です。まさに廣治祖父の時代でした。明治政府は外国人指導者としてフランス人のポール・ブリュナを雇用し製糸場を建設しました。彼がフランスから技術者を招き日本人の体格に合うように改良した洋式の器械を取り寄せました。工場の敷地内には明治6年に建設されたブリュナが家族やメイド達と暮らした建物が今も残っています。その建物はブリュナが去った後の明治13年からは女工の夜学校や寄宿舎として使用されました。

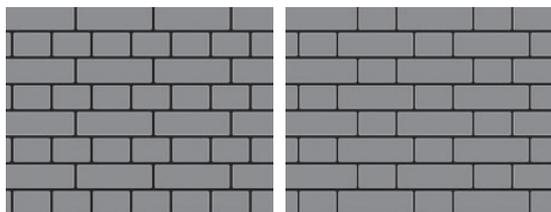
富岡製糸場の変遷・製糸の技術

富岡製糸場は国が建てた大規模な器械製糸工場で、長さが約140mある繰糸所には300釜の繰糸器が並び当時の器械式の製糸工場としては世界最大規模でした。富岡製糸場の建設はフランス人の計画書をもとに明治4年に始まり、繭から生糸を取る繰糸所には全国から集まった伝習女工達が働く、本格的な器械製糸が始まりました。外国人指導者が去った明治9年以降質に重点を置いた生糸は日本人だけで操業されました。官営期を通しての経営は常に順調に黒字ばかりではありませんでしたが、品質は海外で高く評価されました。器械製糸の普及と技術者育成という当初の目的が果たされた頃、官営工場を払い下げて民営化します。明治26年に三井家に払い下げ、その後明治35年に原合名会社に譲渡され、御法川式多条繰糸機による高品質生糸の大量生産や蚕種の統一などで注目されました。昭和13年(1938年)には株式会社富岡製糸場として独立、昭和14年には日本最大の製糸会社であった片倉製糸紡績株式会社(現・片倉工業株式会社)に合併されました。第二次世界大戦後は自動繰糸機が導入され長く製糸工場として活躍しましたが、日本の糸業の衰退とともに昭和62年(1987年)3月ついにその操業を停止しました。操業停止後も片倉工業株式会社によってほとんどの建物は大切に保管され、平成17年(2005年)9月に建造物の一切が富岡市に寄贈され、その後は富岡市で保存管理を行っています。平成17年7月には国の史跡に、平成18年(2006年)7月には主な建造物が重要文化財に、平成26年(2014年)6月には「世界遺産一覧表」に記載されました。さらに、同年12月には繰糸所、西置繭所、東置繭所の3棟が「国宝」となりました。下の絵は上州富岡製糸場之図(一曜斎国輝画 策青年不明(富岡市立美術館・福沢一郎記念美術館所蔵))



主な建造物の建築方法

創業当初に建てられた富岡製糸場の建造物は横須賀製鉄所建設に携わったフランス人のオーギュスト・バステイアンが図面を引き、日本人の大工や職人によって建てられました。これらの主要な建物は木の骨組みに煉瓦で壁を積み上げて造る「木骨煉瓦造」という西洋の建築方法で建てられましたが屋根は日本瓦で葺くなど日本と西洋の技術を見事に融合させた建物です。「木骨煉瓦造」は、最初は横須賀製鉄所で導入された建築工法で横須賀から富岡製糸場に伝わりました。建造物の主要資材は石、木、煉瓦、瓦で構成され、鉄枠のガラス窓や観音開きのドアの蝶番などはフランスより輸入されました。中心となる材木の杉は妙義山、松は吾妻と主に官林より調達し、小振りの材木は近くの山林から集めました。また礎石となる石は連石山(現甘楽町)から切り出してつくりました。フランス人技術者が瓦職人に教えたレンガは福志摩町(現甘楽町福島)の笹森稻荷神社東側に窯を築き瓦と共に焼た。その中心となったのは蒔塚直次郎を含む埼玉県深谷からやってきた瓦職人でした。煉瓦の目地にはモルタルの代わりに漆喰を使い、原料となる石灰は下仁田町青倉・栗山



レンガの積み方 左:イギリス積み 右:フランス積み

で調達しました。煉瓦壁はフランス積みで積まれています。この積み方は主にフランス北部のフランドル地方で用いられた工法で、フランドル積みとも呼ばれています。富岡製糸場は、群馬県富岡市に設立された日本初の本格的な機械製糸の工場である。1872年(明治5年)の開業当時のまま現存している。敷地を含む全体が国の史跡に、初期の建造物群が国宝および重要文化財に指定されている。また、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成資産として、2014年6月21日の第38回世界遺産委員会(ドーハ)で正式登録された。時期によって「富岡製糸場」(1872年から)、「富岡製糸場」(1876年から)、「原富岡製糸場」(1902年から)、

「株式会社富岡製糸場」（1938年から）、「片倉富岡製糸場」（1939年から）、「片倉工業株式会社富岡工場」（1946年から）とたびたび名称を変更している。史跡、国宝、重要文化財としての名称は「旧富岡製糸場」です。

製糸場の概要

日本は江戸時代末期に開国した際、生糸が主要な輸出品となっていたが、粗製濫造の横行によって国際的評価を落としたため官営の器械製糸工場建設が計画された。そこに導入された日本の気候にも配慮した器械は後続の製糸工場にも取り入れられ、働いていた工女たちは各地で技術を伝えることに貢献した。

1893年に三井家に払い下げられ、1902年に原合名会社、1939年に片倉製糸紡績会社（現片倉工業）と経営母体は変わったが、1987年に操業を停止するまで第二次世界大戦中も含め、一貫して製糸工場として機能した。

第二次世界大戦時のアメリカ軍空襲の被害を受けずに済んだ上、操業停止後も片倉工業が保存に尽力したことなどもあって、2005年に敷地全体が国の史跡に、2006年に初期の主要建造物（建築物7棟、貯水槽1基、排水溝1所）が重要文化財の指定を受けて世界遺産登録されたことはすでに述べたが、開国直後の日本では生糸、蚕種、茶などの輸出が急速に伸びた。ことに生糸の輸出拡大の背景にはヨーロッパにおける生糸の生産地であるフランス、イタリアで微粒子病という蚕の病気が大流行しヨーロッパの養蚕業が壊滅的な打撃を被ったことや太平天国の乱によって清の生糸輸出が振るわなくなっていたことなどが背景にあった。その結果、1862年には日本からの輸出品の86%を生糸と蚕種が占めるまでになったが、急激な需要の増大は粗製濫造を招き日本の生糸の国際的評価の低落につながった。また、イタリアの製糸業の回復も日本にとっては向かい風になり日本製生糸の価格は1868年から下落に転じた。

明治政府には、外国商人などから器械製糸場建設の要望が出されており、エシュト・リリアンタール商会]からは資金提供の申し出までであった。これが直接的な引き金となって器械製糸工場建設が実現に向かうが、政府内では外国資本を入れず、むしろ国策として器械製糸工場を建設すべき

という意見が持ち上がり、1870年2月に器械製糸の官営模範工場建設が決定した。これは粗製濫造問題への対応というよりも、従来の座繰りによる製糸では太さが揃わなかったために経糸（タイト）よりも安価で取引される緯糸（ヨコイト）として使われることが多かった実態を踏まえ、その改良を志向した側面があったとも言われている。富岡を建設地とすることを最終決定している。この決定は、①周辺で養蚕業がさかんで繭の調達容易であることや、②建設予定地周辺の土質が悪く農業には不向きな土地であること水や石炭などの製糸に必要な資源の調達が可能であること、③全町民が建設に同意したこと④元和年間に富岡を拓いた代官中野七蔵が代官屋敷の建設予定地として確保してあった土地が公有地として残されており、それを工場用地の一部に当てられることなど様々な要件が考慮された結果であった。

富岡製糸場の建設

明治期の富岡製糸場外観は歌川国輝（2代目）『上州富岡製糸場』（1872年・明治5年）ブリュナは製糸場の設計のために横須賀製鉄所のお雇い外国人だったエドモン・オーギュスト・バスチャンに依頼し設計図を作成させた。バスチャンは明治3年11月初旬に依頼を受けると、同年12月26日（1871年2月15日）に完成させた。彼が短期間のうちに主要建造物群の設計を完成させられた背景としては、木骨レンガ造の横須賀製鉄所を設計した際の経験を活かしたことが挙げられている。ブリュナは設計図の完成を踏まえ明治4年1月22日（1871年3月12日）に器械購入と技術者雇用のためにフランスに帰国した。ブリュナは建設予定地調査の折に地元工女に在来の手法で糸を繰らせて日本的な特徴を把握しており、それを踏まえて製糸場用の器械は特別注文した。目的を達したブリュナはその年の内、明治4年11月8日（1871年12月19日）に妻らとともに再来日を果たすことになる。他方で、ブリュナが日本を発ったのと同じ月には尾高惇忠が日本側の責任者となって資材の調達に着手し、1871年（明治4年）3月には着工にこぎつけていた。建築資材のうち、石材、木材、レンガ、漆喰などは周辺地域で調達した。なお、レンガはまだ一般的な建材ではなく、明戸村（現埼玉県深谷市）からも瓦職人を呼



富岡製糸場の繰糸場（左：明治時代、右：操業停止後）

び寄せ、良質の粘土を産する福島（現甘楽町福島）に設置した窯で焼き上げた。この時期、民部省庶務司から大蔵省業司へと所管が変わった（明治4年7月24日＝1871年9月8日）建設を進めることと並行し明治5年2月12日工女募集の布達が出された。しかし「女工になると西洋人に生き血を飲まれる」（西洋人が飲んでた赤ワインを生き血と誤解した）などの根拠のない噂話が広まっていたことなどから思うように集まらず、政府は生き血を取られるという話を打ち消すとともに、富岡製糸場の意義やそこで技術を習得した工女の重要性などを説く布告をたびたび出した。このような状況の中で尾高は噂を払拭する狙いで娘の勇（ゆう）を最初の工女として入場させた。富岡製糸場は1872年7月（明治5年5月26日から6月26日の間）に主要部分の建設工事が終わるのに合わせて開業される予定だったが予定よりも遅れた。その理由の一つにはこの工女不足の問題があったと推測されている。

官営時代の富岡製糸場について

富岡製糸場は、明治5年10月4日（1872年11月4日）に工場の一つとして操業を開始した。ただし当初は工女不足から210人あまりの工女達で全体の半分の繰糸器を使って操業するにとどまった。翌年1月の時点で入場していた工女は404人で主に旧士族などの娘が集められていた。同年4月に就業していた工女は556人となり、4月入場者には『富岡日記』で知られる和田英（横田英）も含まれていた。女工第1人目・和田英（横田英）については右の写真を参照してください。製糸場の中心をなす繰糸所は繰糸器300釜を擁した巨大建造物であり、フランスやイタリアの製糸工場です



ら繰糸器は150釜程度までが一般的とされていた時代にあって、世界最大級の規模を持っていた。また、特徴的なのは揚返器（アゲガエシキ）156窓も備えていたことである。小枠に一度巻き取った生糸を大枠に巻き直す工程で、湿度の高い日本の気候の場合、一度巻き取っただけではセリシン（生糸を繭として固めていた成分）の作用で再膠着する恐れがあり、それを防ぐために欠かせなかった。

これに対し、ヨーロッパの場合はこの工程が富岡製糸場の繰糸場（上に工場の写真が2枚ある）直燥（チョクソウ）式が一般的で、前出の前橋製糸所が導入した器械も直燥式であった。前出の通りブリューナは富岡製糸場のための器械を特注していたがその一つはこの日本の気候（日本は湿度が高く、巻き取った糸が癒着してしまう）に合わせて再繰式を導入する点にあった。なお特別注文したほかの点には日本人女性の体格に合わせて高さの調整をしたことなどが挙げられる。

工女たちの労働環境は充実していた。1日8時間程度の労働で、食費・寮費・医療費などは製糸場持ち、制服も貸与された。群馬県では県令榎取素彦が教育に熱心だったこともあり、小学校である工女余暇学校の制度が始まり富岡製糸場でも設置された。

初期の富岡製糸場は初代所長（場長）尾高惇忠、首長ポール・ブリューナを中心に運営されたが、前述の不熟練工の問題やブリューナ以下フランス人教婦、検査人などのお雇い外国人達に支払う高額な俸給、さらに官営ならではの非効率さなどの理由から大幅な赤字が続いていた。契約満了につきブリューナとフランス人医師が去った1875年（明治8年）12月31日以後日本人のみの経営となった。1876年度には大幅な黒字に転じた。翌年度には従来、エシュト・リリアンタール社を経てリヨンに輸出されていた生糸が、三井物産によって

リヨンへ直輸出されるようにもなり日本人による直輸出が始まった。内務省の官吏だった速水堅曹はかねてから民営化も含めた抜本改革を提言していたが、西南戦争(1877年)の勃発によって一時的に棚上げされた。しかし、1878年(明治11年)にパリ万国博覧会に赴いていた松方正義(当時は勸農局長)が富岡の生糸の質の低下を指摘されたことから、速水が富岡製糸場の改革を任されることになる。速水は実現させた。松方は後任として速水を第3代所長に任命し1880年(明治13年)11月5日の「官営工場払下概則」制定して、富岡製糸場の生糸の直輸出を一手に担う横浜同伸会社設立に関わり社長に就任した。この時点では民間人となった速水が富岡製糸場を5年間借り受ける民営化しようとしたが政府は最終的にこれを認めなかった。他方で、ほかに払い下げを希望する民間人は現れなかった。富岡製糸場の巨大さが当時の民間資本では手に余る存在だったからと言われている。「官営工場払下概則」が結果的に払い下げを促進することにはならず1884年(明治17年)に廃止されると、官営工場の払い下げは急速に進んだが富岡製糸場は払い下げの見通しが立たないまま、官営の時期がなおも続いた。第4代所長の岡野朝治の時期は、度々の糸価下落などの影響を受け経営的に厳しい時期にあたっていた。そうした状況を受け、1885年(明治18年)には速水が第5代所長として復帰した。速水は同伸会社社長時代に、一手に輸出を引き受けていた富岡製糸場の生糸を、リヨン以外にニューヨークにも輸出するようになった。彼は製糸場所長として改革を進める一方でアメリカ向けの輸出も増やし、米仏の両国で富岡の生糸の評価を高めた。他方で速水は民営化を引き続いて主張していたがそれは1890年代になってようやく実現することになる。

まとめ

祖父は明治維新後、万民平等という思想・世の中が変わることを見越して行動した。その新しい時代に自らを鼓舞・発奮して活動した。踊らされたのではなく新しい時代を感じ取り、それを力として機敏に動き、勇気をもって活動しました。祖父はそういう信念を持つ人物でした。それだけ責任感の強い人物だったのです。

知らんけど。

私の父の郵便物は「愛媛県・黒田顯先生」で長年届いていました。これ本当の話です。私はこの頃郵便切手を収集し始め、父の郵便物の封筒を集めました。沢山になりすぎてこの封筒から中学生の切手だけを取り、封筒を廃棄したのが今となっては残念です。

祖父は若いころ、我が子には新しい時代に「学問が必要だ」と子供達には男も女も皆大学(今の制度では専門学校、各種学校短大に当たるものも含む)に進学させ、自分は世の中の動きを見て機敏に事業を起こした。間違いなく富岡製糸場にも訪れていたはずです。周桑製糸には学校を併設していました。これは富岡製糸場と同じやり方です。そういう大きな変革の時代を生き抜いた人であることが確信できました。今回富岡製糸場を訪れて改めて強く感じました。行って良かった。



上の写真は明治44年(1911年)撮影と推定される

1961年大阪で勝士君(上に述べた3人の従兄弟の1人)と浪人生活を始めた時、伯母さん(父の妹)から聞いた「廣治お爺ちゃんは神戸の生糸工場での活躍していた。「誰かその後を一人くらい継ぎなさい」と言われた。私はこの時周桑製糸のことなど知る由もなく神戸の工場跡のことも全く知らなかった、浪人生活を終えた時神戸の工場跡を見に行きたかったがそれがどこにあったのか聞き忘れたので探しようもなかった。

今回その答えに迫れるか?何かを得られるか?と思いましたがそんな情報はここには何もなかった。2019年富岡製糸場のことが詳しく紹介された新聞記事を見て思い出した。

コロナの流行が起こりどこにも行けない時でした。やっと時間が出来た時でした。調べてコロナ以後の第一番候補としていました。今年の7月病院勤務を止めて一番に行ってきました。

灘五郷ほろ酔いウォーキング

天野 祐一（昭和57年入局）

令和5年11月23日好天のもと、毎年恒例となりました市整会有志の山歩きを敢行致しました。今回は2年連続の怪我人輩出となった山歩きはお休みして、灘五郷の酒蔵ウォーキングになりました。折しもこの日は38年ぶりの阪神タイガース優勝記念パレードが神戸と大阪で開催される事になっており、参加メンバーは気もそぞろ。ニュースでは神戸、大阪に100万人の人出とのこと。阪神愛って凄いですね。

今回参加はいつものメンバーでした。秋野一男先生、奥田均先生、金井秀彰先生、高山優先生と小生の5人。山登りではないので気楽な散歩スタイルです。

灘五郷というのは、灘地区にある酒造メーカーの所在地が5つに分かれており西側から西郷（にしごう）、御影郷、魚崎郷、西宮郷、今津郷の酒造りの郷（さと）の総称です。この地は日本酒造りに好適な硬水が湧出しており、西宮神社の沿岸部にあることから「西宮の水」と言われ、それがいつしか「灘の宮水」と呼ばれる様になったとのことです。

この硬水というのはミネラルに富んでおり、コンビニで売られているミネラルウォーターで硬度30~40、宮水は硬度100で日本屈指の硬水だそうです。麴（こうじ）や酵母の成長に必要なリンやカリウム、カルシウムが豊富で、これらのミネラル分は酵母の栄養源となり比較的短時間で発酵し、酸味の多い辛口になり、そのため飲み口に切れが有り、昔ながらの日本酒という印象でしょうか。

これに対して軟水で仕込む日本酒造りも多く、伏見の酒が有名です。伏見の地層は花崗岩が多くマグネシウム、カルシウム等の成分を程よく含み、発酵がゆっくりとすすむため酸は少なめ、まろやかで淡麗な酒質になるとのことです。「灘の男酒、伏見の女酒」といわれる所以らしいです。

見学出来る酒蔵も名だたる酒造メーカーあり小

さな酒蔵ありです。西郷（にしごう）には沢の鶴酒造。御影郷には福寿、剣菱、白鶴酒造、菊正宗酒造。魚崎郷には櫻正宗、浜福鶴。西宮郷には日本盛、白鷹、白鹿。今津郷には大関とざっとあげても知らぬ者のいないビッグネームばかりでした。

酒蔵は10時に開店する所が多く、9時45分大石駅を出発し、まずは西郷の「沢の鶴酒造」の資料館に向かいます。立派な酒蔵の中で8分間のムービーを鑑賞、丹波杜氏さんの案内で酒造りの流れを学びます、大きな樽や蒸すための甑（こしき）、酒を搾る舟や重しをかける男柱、麴室（こうじむろ）など蔵の中は二階建てで機能的に出来ています。「船口」「斗瓶取り」「無濾過」など酒呑みをくすぐる用語の語源がよく分かります。この大きな木樽に15石2250キロの酒の原料を仕込みます。物凄い量ですが、昔はシーズンが限られているため、これを毎日1樽と3分の1樽ずつ仕込んだそうです。

とは言え、現代では高さ20メートル程、直径3メートル程の屋外タンクがそこかしこに林立しており、消費量が減ったとは言え日本の酒の供給量の凄さに驚きます。この日は酒蔵ウォークスタンプラリーをやっており、童心に戻ってスタンプを集めました。

各酒蔵では無料の試飲があり、沢の鶴では純米吟醸酒をいただきました。さすがに男酒、大学時代の昔からなじんだ日本酒という印象でした。昔のポスターも飾ってあり、確か三橋美智也がCMソングを歌っていたように覚えています。

ここから東に「西郷酒蔵の道」を歩いて行くと海側に大きなマンションが並んで建っていますが、道に面した建物は酒蔵に似せた瓦葺きの酒蔵のような外観で、景観を保全しているようでした。

さて新在家にある大きなショッピングモールを超え43号線を北に渡ると、テレビCMでお馴染み



の甲南漬本店の資料館「武庫の郷」です。登録無形文化財の立派な洋館があり、江戸時代末期から続く醸造業で焼酎を作り、その後味醂の製造を始めて、明治37年から奈良漬を始めて今日に至るそうです。昭和5年に甲南漬に名称変更しました。「甲南」というのはこの登録商標だそうです。

そもそも奈良漬は、奈良の長屋王（684年～729年）の邸宅跡から発見された木簡に「加須津毛瓜」が粕漬の毛瓜（とうがん）の送り状が読めることで、これが奈良漬の原型であると言われていました。

この敷地も広く駐車場も完備、お食事処や喫茶、販売店も充実しており、カルチャーセンターもしています。地元根付いた老舗ですね。

ここからもう一度43号線を南に渡り、程なく「福寿」の神戸酒心館に向かいます。既に11時30分。観光バスが2台来ていました。ここは資料館の説明ツアーが事前予約制で観光コースに組み込みやすいのでしょうか。売店も人でごった返しており、販売員のお姉さんも商売っ気満載でした。駐車場と資料館の間は桜並木となっており春には花見も楽しめそうです。もちろん試飲しました。ここから東へ石屋川を渡り「剣菱」の西側の「灘五郷酒所」で足がとまります。若いお姉さんが中で酒についてのレクチャーをしていて、通りがかりの人達が20人くらい説明を聞いて試飲しています。もちろん引かかって試飲しました。愛想のいい店員さんはお店の宝ですね。更に東へ歩き「白鶴酒造」に差し掛かります。町の一角というよりは二区画が白鶴酒造で、道の上にも倉庫に運ぶ通路や、パイプラインが走っています。資料館は同じ作りですが、マネキン人形で酒造りを再現していました。試飲コーナーはなんと無人で自動



のディスペンサーの器械からいくらかでも酒が出て来ます。何という太っ腹。ここに腰を据えればいくらかでも酒が飲めるのでは、と不埒な考えがよぎりましたが、そこは常識人、柚子のお酒を買って帰りました。

それとは別に有料試飲の器械があり、500円で2枚のコインを買って器械にいれると純米大吟醸など上等のお酒が2杯飲めます。

続いて東側に隣接する「菊正宗酒造」です。渡哲也のCMが思い浮かびます。「～やっぱり俺は～菊正宗～」でした。百黙や嘉宝など見るからに旨そうな日本酒が並んでいます。高山先生曰く「菊正宗のポスターが一番美人ですね」とのこと。さすが目の付け所が違う。また「ここでしか買えない」という売り言葉に弱いオヤジ達は、この後は温泉だけなのでせっせと買い求めました。時刻は1時20分、このまま住吉川を渡って櫻正宗と浜福鶴にも行きたかったのですが、一行はかなり酔って来たので、おなか減ったの合唱。そのまま10分の距離の毎度おなじみ恋野温泉、うはらの湯に到着。奥田先生の万歩計は15000歩でした。

入浴、宴会、あれやこれやの知らなかった情報も飛び交います。知人の消息、我が身の好不調など、かの牡丹花肖柏に習い上品で節度ある宴会になりました。

戦国の城跡探訪 小谷城跡と国友の鉄砲 戦国のゲームチェンジャー出現

天野 祐一（昭和57年入局）

北近江のどこからでも見える小谷山は、長浜の北東側にそのなだらかな山様があり、南に姉川、東は伊吹山、もちろん西は淡海の湖（あふみのうみ）に囲まれ北国街道、東山道（中仙道）の交わる交通の要です。琵琶湖の湖面水位が84メートル、小谷山は標高494メートル。南北に長く最高地点の大嶽（おおずく）には麓からは2時間近くかかります。南側から中腹までは車で入ることが出来ますが、そこからでも殆ど登山のような険しさで、難攻不落と言われたのも納得です。2月の早朝に訪れた時には中腹までうっすら雪が積っていました。長い尾根伝いに城への階段があり土塁の跡や絶壁に囲まれて要所に郭も見られました。中腹に井戸跡があり籠城にも耐える山城でした。頂上の大嶽には冬で時間が無くて上がれませんでした。ぜひ登ってみたいです。

北近江の守護、京極氏のお家騒動に乗じて家臣であった浅井氏がこれに乗っ取り、戦国の幕開けとなりました。1520年代から浅井3代でこの小谷山に土塁を築き石垣を積み、郭（くるわ）を配置し要塞にしていきました。3代目浅井長政は織田信長の信も厚く、妹の市を嫁に貰いましたが、一向宗や比叡山、朝倉氏などの信長包囲網や戦国下克上の機運もあり信長に反旗を振りかざしてしまい1570年の姉川の戦いで信長に敗れます。

しかし、さすがは戦国屈指の山城、その後3年にわたり猛攻に耐えに耐えましたが、1573年織田の軍勢に囲まれ、家臣は調略され、真正面の位置にある虎御前山に城を築いた秀吉らに攻め滅ぼされます。難攻不落と言われた小谷城も兵糧攻めと家臣の調略、直前朝倉氏の援軍を頼れなかった事などで落城しました。

攻城戦において、攻め手は3倍以上の軍勢が必要とされますが、時は戦国、種子島（鉄砲）の普及により戦の様相は激変しつつありました。まさ



にゲームチェンジャー出現です。

さて1543年8月25日に種子島に漂着した中国船に乗っていたポルトガル人から伝えられた火縄銃は、2千両＝数億円という高価にも関わらず島主の種子島時堯氏に2挺買い取られて、種子島でも伝来からわずか8ヶ月後に国産銃が完成します。また、これを1挺足利将軍に献上されたので将軍の命で近江国友でも早くも伝来の翌年には作り始められました。また1挺が紀伊国根来寺の僧侶に譲り渡されたそうで、根来寺から地理的に近い紀州雑賀につたえられました。雑賀の里には朝鮮からの帰化人で鍛冶職人が多く、ここや根来寺で鉄砲が量産化されました。戦国期からの生産地は種子島、国友に加えて薩摩です。さらに備前、阿



中央が伊吹山から見た小谷山

波、堺、日野、米沢、仙台でも製造されてゆきます。長浜市にある国友鉄砲ミュージアムは小さい施設ですが50挺あまりの鉄砲が展示されており、実際に構えることも出来ます（写真）。そう言えば山形や各地にも鉄砲町という町名がありましたね。全国でも作っていたのでしょうか。備前と言えば刀鍛冶、堺もそうですし今は包丁で有名です、大規模で技術のある鍛冶屋のあるところに鉄砲を作らせていたのでしょうか。製銅技術があり、資金もある伊達藩はもちろん作り始めていたようです。

余談ですが、それまで日本にはネジというモノが無く釘や鋸（かすがい、木と木をつなぐコの字の金具）しかありませんでした。鉄砲の後方の口（尾栓）はネジ止めされており、この火薬の爆発に耐えられるネジの制作に難渋したようです。ここからネジが開発されましたが、日本の歴史を大きく変えるのは幕末になってアメリカの海軍造船所を見学した幕臣が日本に持ち帰った1本のネジからと言われています。

敦賀にある金ヶ崎城跡にある金ヶ崎神社を訪ねた時に宮司さんに城の攻防についてお話をお聞きしました。

それまでの戦いは騎馬武者と槍と弓矢、刀の戦いでした。弓矢の射程距離はせいぜい10メートル前後なので小さな城でも守ることが出来たのが、鉄砲の普及でこのような小さい城はあっという間に攻略されてしまうとのこと。射程距離が数

倍から500メートルにも及ぶ鉄砲による戦闘に変わったため、城も鉄砲の弾を跳ね返す鉄の門扉や分厚い壁、高い城壁や幅広い堀を持つ巨大な城郭に変わってゆきました。

甲州の武田勝頼を退けた1575年6月の長篠の戦いには信長は3000挺の鉄砲を用意したようですが、この時武田側も1000挺の鉄砲は持っていたそうです。しかし、鉄砲の弾の備蓄が勝敗を決したかもしれません。織田軍は9万発に対して、武田軍は5万発の用意しか出来なかったという研究もあります。また、鉄砲に適した鉛弾を用意できず、銅銭から作った銅製の弾だったので弾詰まりから暴発があったようです。新兵器獲得合戦もまた信長、秀吉、明智光秀ら兵站担当者の戦いだったのでしょう。

今村翔吾の「斎王の盾」には穴太衆の積む石垣が鉄砲の弾を跳ね返して撃退する「そり」のある城壁について書かれています。

戦国の終わりを告げる1600年の関ヶ原の戦いから1614年11月の大坂冬の陣では徳川方は100門の大筒を並べて城に撃ちこまれ、さすがの茶々姫も和睦に応じましたが、さらに1615年4月の夏の陣では真田幸村、後藤又兵衛らの善戦むなしく豊臣方は敗れて、この時から徳川260年が始まります。

しかし、この時代を終わらせるのも幕末の浦賀にやって来た4隻の蒸気船と大砲です。

これもまたゲームチェンジャー出現といえるのでしょうか。

たにまち 13

阪本 博史（昭和59年入局）

この原稿を書いているのが、九州場所7日目、場所後、貴景勝が、横綱になったのか？大栄勝が大関になったか？気になるところです。どちらもだめな気がします。

最近、めきめき力をつけている力士がいます。「豪の山」です。大阪寝屋川出身、武隈部屋。寝屋川のちびっ子相撲道場出身で、埼玉栄高校へと豪栄道と同じコースで力士になりました。中央大学相撲部で学生相撲準優勝で三段目100枚目格で、境川部屋に入門、豪栄道が部屋を興した際に移籍しました。押し相撲で、馬力のある力士です。九州場所、大栄翔との一番は見ごたえある取り組みでした。今後楽しみな若手です。

【年寄り株】

年寄を襲名することが出来る権利のことをいいます。年寄になる事で現役引退後の相撲協会において、協会役員に選出されます。年寄株を持っていないと、相撲協会に残ることも出来ませんし、自分自身の部屋を持つことも出来ません。年寄株を持っている親方がすべて部屋をもっているわけではありません。

【年寄を襲名する条件】

襲名する一定の要件

- ①日本国籍である
- ②小結以上の番付に1回以上なっている
- ③幕内在位20場所以上
- ④十両以上の関取として30場所以上在籍

【年寄株の取得方法】

年寄株は全部で108あります。今のところ、誰のものでもない株はふたつだけで、残りの106は全て所有者が決まっており、相撲協会職員です。新たに株を取得するには、すでに持っている親方から譲ってもらう以外に方法はあります。親方は協会職員ですので、定年60歳、再雇用70歳まで

となっているので、基本的には、退職者が出るまでは株の取得はできません。（個人タクシーの営業免許と同じ）譲ってもらうには、1億円以上必要という噂です。（よほど上の地位で永く相撲をとっていたか、懸賞金をたっぷり稼いだか、良い「たにまち」にお金を出してもらったか、お金持ちの奥さんをももらったか、親方の娘さんと結婚でもしないかぎり、なかなか手に入りません）現役から親方になり協会に残って定年後年金生活を送る為には、是非とも必要な資格です。1998年株の貸し借り禁止。2014年株名跡の協会一括管理。借り株、売買禁止など打ち出されましたが、やはり一門内でのやり取りが今でも常識のようです。一門内の親方株の数は決まっており、その株が他の一門に流出すると、理事選での票の減少、ひいては一門の力関係の低下につながるので、一門外への株の譲渡は、一門制度を軽んじた行為とみなされます。

【相撲部屋を新設して師匠になる条件】

- ①横綱もしくは大関経験者
- ②三役（関脇、小結）通算25場所以上
- ③幕内60場所以上

ですので、新しく相撲部屋を興すには、強い力士であったことが重要です。現在、新しい部屋を興することができる力士は、横綱大関経験者8人と、遠藤関の9人だけです。ただし、部屋を興す資金力も重要な要素です。（遠藤関のお嫁さんは永谷園の娘さんなどという噂もありますが、これは嘘です）

例外として、年寄名跡を襲名せず年寄として活動できる「一代年寄」という制度があります。功績顕著なる力士として推薦された力士に与えられる年寄名跡です。元々、1969年現役であった横綱大鵬を年寄大鵬として親方にさせる目的でできた制度です。目安として「幕内最高優勝20回以上としています。」歴代取得者は、大鵬、北の海、千

代の富士、貴乃花。朝青龍は日本国籍で無い為、不可。白鵬は45回優勝していますが、度重なる問題行為のため、これに相撲協会から推薦されませんでした。2021年9月白鵬が引退し、年寄「間垣」を襲名しました。条件からすれば、すぐにも「部屋もち親方」になれるところでしたが、現役時代の言動を理由に「年寄り資格審査委員会」が「年寄襲名を認めるも、条件を付けるべし」となって、「10年間の宮城野部屋付きの親方として親方業を習熟すべき」との要望が出され、「新人親方として理事長はじめ先輩親方の指揮命令指導をよく聞き、本場所など与えられた業務を誠実にを行うこと。大相撲の伝統文化や、相撲道の精神、協会の規則、ルールやマナー、相撲界の慣わししきたりを守り、そこから逸脱した言動を行わないこと。」という事項をまとめた誓約書に署名するという条件で年寄襲名が認められました。元横綱としてなさけないと思いませんか？

【借り年寄】

現役引退時に年寄株が取得できていなく、協会

に残りたい時に、現時点で襲名されていない年寄株を期間限定で借りて協会に残るときに使う制度です。実力、財力のある力士は、引退時に年寄株を取得する道筋をつけているものですが、突然の引退や準備不足の為、とりあえず空いている年寄株をその株の持ち主に使用料を払って協会に残る方法です。が、現在ふたつしか空き株はないそうです。あの高安でさえ、約束している年寄株の取得が、2026年5月まで定年を迎えない親方のものなので、それまで相撲をとり続けなくてはならないそうです。

現役で年寄株を持っているのは、遠藤「北陣」、阿武咲「音羽山」のふたりです。

【あとがき】

若い有望な力士がどんどん出てきています、楽しみですが、かつて大関までなった、正代、高安など力の衰えが隠せません。朝乃山の復活が待ち遠しい今日この頃です。照ノ富士はあの膝では復活できないでしょうね。



真夜中の熱帯魚～多発外傷体験記～

古瀬 洋一（昭和60年入局）

2023年2月23日（天皇誕生日）、20年ぶりに長野県白馬村梅池高原スキー場を訪れた。スキー人口の減少でリフト待ちの列はなく、スキー場のメインストリートも寂れた感じが漂っていた。ところがリフト券売り場にはインバウンドの外人客が溢れ、いろんな言語が飛び交い騒然としていた。発券窓口のかわいい女性が英語と中国語を流暢に喋るのに驚いた。

滑り始めて約2時間、そろそろ昼食休憩と考えていた時だった、右後方からフルスピードでボーダーが衝突してきた。足元をすくわれて背中から雪面に落ちた。暖冬の影響でパウダースノーではなく固く締まった雪面でまるでコンクリートの地面に叩きつけられたようだった。経験したことのない痛みにただ事ではないと思った。犯人は既にゲレンデのはるか下方に逃げていた。体格と見たことのない色合いのウエアから外人と思った。しかし今は犯人を捕まえることよりこの痛みと状況を何とかしないとイケない。まずゆっくり両足を動かしてみた。動いた、脊損はなさそうだ。次に両手を動かしてみた。これも大丈夫、BPIもなさそうだ。深呼吸してみると激痛が走り、深く吸気ができない。右肋骨骨折がありそうだ。1本や2本ではなさそうだ。と自己診断しているところに同行のY先生が追い付いて「先生、大丈夫ですか。」と、「大丈夫ではない、パトロールを呼んでくれ。」「立てますか。」「絶対無理！」

ゲレンデに横になってパトロールの到着を待つ間に右鎖骨にも圧痛があることを発見、もう一度右上肢を動かしてみて神経損傷はやはりなさそうと安堵した。スノーモービルでパトロールが到着、後部座席に移動するのが大変で、少しの体動で激痛が走った。山麓に着いて119番通報して救急車を要請した。救急車のストレッチャーに乗せてもらったが救急隊員の顔には「大げさなおっさんが救急車を呼びやがって」という感じが滲み出していた（写真1）。



写真1

約10分で白馬村の「しんたにクリニック」に到着。スキーシーズンは日曜・祝日も通常診療していた。自分は整形外科の医師であることを告げて、右肋骨のレントゲンを撮ってくださいとお願いした。また撮影の前にかく鎮痛剤を内服させてくれと頼んでロキソプロフェンを自己責任で3錠内服した。レントゲンの結果は右肋骨が5本骨折、右鎖骨も骨折、気胸（おそらく血気胸）であった。CTを追加することになったが痛みのために仰臥位が取れなくて断念した。松本市内の病院に二次搬送することとなり再度救急車を要請した。先ほどと同じ隊員たちで「えっ、そんなに重症だったの…」とすまなそうな表情を見せた。

1時間弱で松本市の相澤病院に到着した。ロキソプロフェン3錠一気飲みが少し効いてきて何とかCTを撮ることができた。CTで右肋骨6本の骨折、血気胸、右鎖骨骨折と診断された（写真2・3）。胸腔ドレーンが必要と言われたが（言われなくてもわかったが）とりあえず呼吸苦がないので明日まで待ってくれとお願いした。今の俺に必要なのは胸腔ドレーンではなくて大量の鎮痛剤だ。



写真2

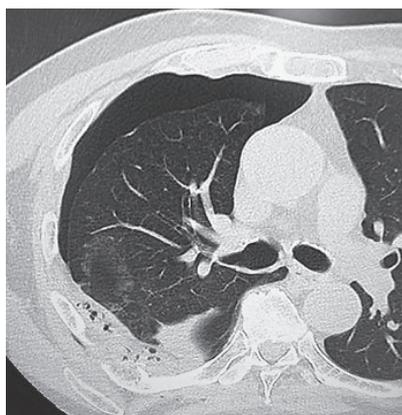


写真3

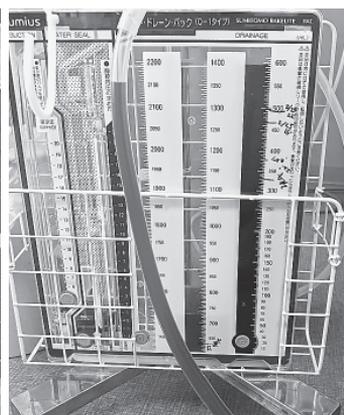


写真4

どれだけの薬を内服したが覚えていないが ترامセツとロキソプロフェンを大量服用して痛みが少しましになったので電話で妻に連絡した。妻が当日中に車で松本まで来ることになった。元々前日から松本市内にホテルを取って滞在していたので妻はそこにそのまま宿泊することになった。スキー合宿のような行程だったのでホテルの部屋には飲む・打つ・買うといった痕跡を残していなかったのが不幸中の幸いだった。翌朝、担当医と面談してもう一度CTを撮って悪化していなければ大阪に帰ってから胸腔ドレーンを挿入することにした。担当医には「危険ですよ、自己責任で帰ってくださいね」と釘を刺された。

2月24日午前10時に相澤病院を出発。加速・減速、カーブの遠心力でも痛みが走った。当初は自院に入院してドレナージする予定だったが誰もが胸腔ドレーンを挿入するのを嫌がった。近くで開業している心臓血管外科医に相談しても救命センターに行けと言われた。そこで車内から済生会野江病院の副院長に電話をかけて相談したら快く受け入れてくれた。17時に野江病院に到着した。病院のストレッチャーに乗って初療室に入り、10分後にはドレーンを挿入された。入院時のコロナPCR検査がなんと陽性（相澤病院では陰性）に出たが感染の既往ということで通常の個室に入院となった。

痛みのために1時間ごとに覚醒した。静まり返った病棟、病室の薄暗いダウンライトの中、持続低圧吸引装置から聞こえるポコポコという泡の音だけが響いた（写真4）。この音、どこかで聞き覚えがある、そうだ子供のころに叔父の家にあった水槽だ。夜にトイレに行くときに廊下に置いて

あった水槽から聞こえてきた音と同じだ。昼間はまったく聞こえないのに、夜の静寂の中で淡い照明に照らされてポコポコという音が聞こえてきた。その音に合わせて色鮮やかな熱帯魚たちが踊っているようだった。なぜか自分も熱帯魚になったように感じた。早く自由に泳ぎたい。

2月28日、胸部レントゲンの結果、ドレーンを抜去することになった。4日間の熱帯魚気分だった。挿入するときは指導医が横にいてレジデントが挿入した（と思う）。抜去は若いのが一人でやってきた。少し悪い予感がした。ドレーンを抜くのは痛くも痒くもなかった。その後だった。抜いた穴に無麻酔でステイプラー2発を打ち込まれた。何かの雑誌で戦争捕虜や捕まえたスパイの身体中にステイプラーを打って拷問するのだと読んだことがある。俺はスパイか。

3月2日、右鎖骨の手術を受けた。保存的という選択肢もないわけではなかったが鎖骨だけでも安定化させないといつまでも肋骨も安定化しないと思ひ決断した。安定化させるのだからKワイヤー固定よりも強固なプレート固定を選択した（写真5・6）。全身麻酔なので苦痛はなかった。30年近く前に胃の手術を受けたときに挿管困難で手術開始までに2時間近くかかったことを申告したのでいろいろ準備してくれて問題なく麻酔は成功した。手術の立ち合いに来たシンセスの社員に執刀医が「この患者を知ってるか？」と尋ねたので彼がカルテを見てひっくり返りそうになったらしい。スクリューの長さを何度も確認して出したそうだった。

3月3日、病棟師長が病室にきて個室が必要な患者がいるので病室を変わってくれないかと頼ま

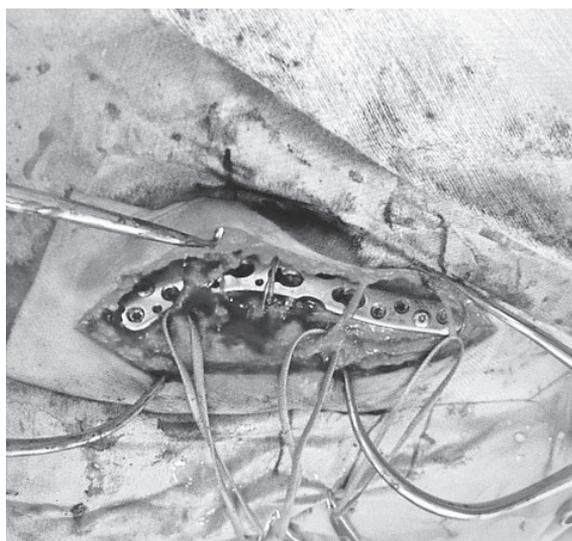


写真5

れた。もうやることはないので病室を変わるくらいなら退院しますと答えると直ぐに執刀医に連絡してくれて「患者の好きにさせてあげて」と許可が出た。それで妻に今日退院するから迎えに来てくれと連絡したら「邪魔やから帰ってくるな」と一喝された。仕方なく奈良に住んでいる妹に迎えに来てくれと頼んだら行ってあげるとのこと。やはり妻は他人と思ひ知った。ところがこの顛末を聞いた妻の姉がわざわざ奈良から来なくても私が迎えに行き行ってあげるといふことになり目出度く退院することができた。

自宅に帰って問題が発覚した。病院ではベッドがギャジアップするので臥位から座位はボタンを押せば苦痛なくできた。自宅のベッドはギャジアップしないので臥位⇔座位は自力で行わなければならない。腹筋・背筋に力を入れるととんでもない痛みが走った。側臥位になって両下肢をベッドの外に垂らしてベッドにくくりつけた紐を左手で引っ張って端坐位になった。

退院したのを聞きつけた師長がやってきて「来週の仕事はどうしますか」と尋ねられた。座ってるだけなら何とかかなると思ひ、3月6日から外来に復帰した（復帰させられた）。帰ってくるなど言っていた妻も仕事をしている姿を見て文句は言わなくなった。結局5日間休診しただけだった。3月15日からは簡単な小手術も再開し、3月25日には予定通り福井県敦賀市で講演を行った。4月にはほとんど受傷前と変わらない仕事の質と量に戻った。



写真6

さすがにゴルフは厳しく、6月にようやく素振りが可能になった。8月にコースに復帰したがドライバーを振ると今も背中に痛みが走る。しかし神様はゴルフのできない私にプレゼントを与えてくれた。我が阪神タイガースの週末の甲子園球場での試合は6月末までほとんどデーゲームである。ゴルフのできない私にデーゲーム観戦の機会を与えてくれた。38年ぶりの日本一になった今年、甲子園で50試合以上観戦できた。また週末は各地に遠征し、エスコンフィールド、東京ドーム、神宮、横浜スタジアム、マツダスタジアムに出かけた。まさに怪我の功名であった。

9月にCTを再検した。受傷直後のCTではまったく分からなかった多数の部位に仮骨が形成されていて驚愕した。結局、右肋骨9本（第1～第9）に13か所の骨折があった。整形外科医としてこれまで何百人もの肋骨骨折患者を診てきたが間違いなく最重症である。最近は鎖骨骨折と肋骨骨折の患者には私の画像を見せて「俺より軽症だから大丈夫」と説明している。手術適応の患者には自分の手術創を見せてそして万歳をして見せて、こんなに回復するから手術しなさいと言っている。

最後に、現地で大変お世話になり迷惑をかけたY先生、松本まで迎えに行きますよと声をかけてくれたM先生とO先生、休診中とその後完全復帰までの間サポートしてくれた自院のスタッフ、そして家族にお詫びと感謝を申し上げて稿を終える。

野口英世に思うこと

竹中 稔幸（昭和62年入局）

野口英世に関しては、皆さん子供の頃に伝記で読まれて感銘を受けた方も多いと思います。概略すると、幼いころに手の大やけどを負って、変形して不自由な手を「てんぼう、てんぼう」といじめられながらも勉学にいそしみ、アメリカに渡ってからは医学研究者としてノーベル賞候補にもなるほどの不朽の名声を博した人物といったところでしょうか。

これほど皆に称賛されている人ですからより興味・関心を持って学生時代とかに詳しく調べた人も結構いらっしやると思います。私もその一人でしたが、この人は調べていくとどうも称賛に値するような人物ではなく、ろくでなしという言葉がふさわしいのではないかと思います。

この人が幼いころから勉学に優秀だったのは間違いありませんが、ちょっと周りが一目置いてくれるようになるとすぐに舞い上がってしまうとか本性が出てしまい、若くして悪い遊びを覚えてしまい、金銭的にもルーズで、借金の踏み倒しもざらというか金は借りても返さなくていいと開き直っていたような人でした。皆が期待し中国（当時は清）への渡航費用を用立てしてくれたにもかかわらずすべてを遊興に使い果たして、渡航費をまた借りるというようなでたらめな人でした。その上、アメリカへの渡航費用を借りるために結婚を約束してそのお金をまたしても使い果たし、婚約者の父親に船の切符と衣服を買ってもらって出発するようなありさまでした（現金を渡したら切符や衣服を買わずにまた遊びに使ってしまうと思ったんでしょうね）。しかも渡米してからアメリカ人と結婚してしまいました。これって立派な結婚詐欺ですよええ。

まあ人物としては問題ですが百歩譲って業績が素晴らしければその才能を評価してもいいでしょう。確かに神経梅毒（脊髄癆）でのスピロヘータの証明などそれなりの業績を上げておりますが、

この人、実は様々な病気の病原菌を発見したと論文発表しているんですね。「梅毒スピロヘータ」も自分が純培養に初めて成功したと発表していますし「黄熱病」も原因菌（あくまでも菌）を発表しているんです。原因菌の同定には有名な「コッホの三原則」がありますが、当時は様々な病気で原因菌がなかなか同定されず、「こんなに多くの研究者が必死で取り組んでいても発見できないのに、なぜ野口だけが同定できるんだ」と疑惑の目を向けられていました。また、病原体が発見できないのは「細菌よりおそらくは小さい未知の病原体があるんじゃないか？」といわれていました。後に様々な病気で発見され、今では皆さん誰もがその存在を知っているウイルスです。

ウイルスの発見は電子顕微鏡の登場を待たないといけませんでしたから多少の誤発表はやむを得ないかもしれませんが（北里柴三郎もインフルエンザの原因菌として「インフルエンザ桿菌」を報告していますからある程度は仕方がないのかもしれませんが）、誰もが発見できないのをいいことに次々と原因菌の発表を続けるのはねつ造（making）ということになるのではないのでしょうか？。しかも「なぜ、あなただけがそんなに上手に発見できるのだ？」とねつ造を疑うような質問をされると「お前たちのtechniqueが未熟だからだ」と反論していたそうですから開き直りも甚だしいですねえ。

さらに「スピロヘータ（トレポネーマ）」もそれ以前に報告されているにもかかわらず自分が初めて純培養したと言い切るのもいかがなものでしょうか？黄熱病に関しては彼は病原菌だけではなくその治療法も報告していたのですが、他の研究者から「少なくともここガーナでは野口の発表する治療法は無効である」と名指して批判されてしまい、以前からのねつ造疑惑もあり、アメリカでは居場所がなくなってガーナに渡ったというのが実情のようです。

当地での研究中に黄熱病に罹って亡くなるわけですが、最期の言葉が「私にはわからない」だったそうです。わからないからといってねつ造はいけませんよねえ。野口英世の伝記で「野口の業績は現在では大部分が否定されている」の一言で済まされていいものなのでしょうか？

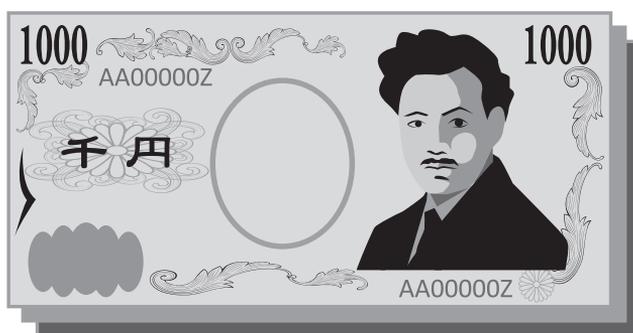
なぜ野口英世にここまで辛らつに述べたかといいますと、この人は千円札の肖像になっているんですよ。海外でもねつ造で有名なのに、なぜ選ばれたのですかねえ？

この人はロックフェラー研究所に転がり込んで最初はdoctorでなくtechnicianとして採用され、業績を重ねて研究員としての地位が上がっていったのですが、業績を上げないといけないという点では「STAP細胞はあります」の女性研究員と同じ立場だったんでしょう。

さらに、この人は福島県出身で、県内には「野口英世記念館」まであるのですが、東日本大震災

の時に福島第二原発事故があったので、復興の励みにするために（翌年の分はすでに決定しているので）翌々年の大河ドラマで多分地元出身の偉人を取り上げるだろうと思っていて、この人が選ばれたら世界中に恥をさらすようなものじゃないかと心配していました（選ばれていたら、どういふふうに人物像を描いていったのかというところには興味がありますが）。実際には『八重の桜』で新島八重が主人公だったわけで正直言ってホッとしました。野口英世だったら前述のように人間性、研究姿勢ともに主人公としてふさわしくないと思います。。朝ドラの牧野富太郎も女性に対してはだらしのない人物でしたが、研究者として植物に取り組む姿勢は称賛に値しますからねえ。

来年には新しい紙幣が発行され、徐々に野口英世の千円紙幣は消えていくでしょう。でも紙幣に選ばれる人はある意味日本を代表しているんだから今後、人選には気をつけてほしいものです。



今の車は面白い

鱧永 浩 (平成7年入局)

今回は、今乗っている車について書いてみようと思います。

現在は、BMW M440i クーペとM440i グランクーペ（クーペ風5ドアハッチバック）の2台が我が家の車です。同じシリーズ、グレードの車ですが、ボディ形状が違うタイプの2台です。基本は同じシャーシで、3リッター直6ターボの同じエンジンを搭載する、8速AT車です。それぞれ2ドアクーペと5ドアハッチバックの4輪駆動車です。FFベースのアウディクアトロ（4駆）のFRベースのような感じでしょうか。ゴリゴリのスポーツタイプの真のM4とは違って、街乗り重視の、スポーツ風味のタイプです。クーペは主に家内が、グランクーペは私が運転しています。

クーペはボディ剛性が高く、がっちりしていて、タイヤもピレリ製であるためか、安定感が抜群で、思い通りにクルマが動いて気持ちがいいです。欠点は、ロードノイズがやたら大きいことで、少し興醒めです。オーディオはハーマンカードンが標準でついていますが、同じものを搭載しているグランクーペと違って、音がとてもよいです。家内と娘が大好きな、韓国アイドルの曲がいつも流れています。後席はドアがないので出入りは手間ですが、乗ってしまえば中は広く、大人4人普通に乗れます。

それに対して、グランクーペは、ハッチバックであるので、トランクルームがガバッと大きく開くので、荷物の出し入れには便利な反面、ボディ後半の剛性が弱く、メーカーは、床下に補強をかなり入れていて、（クーペより車重が100キロ重いです）クーペと遜色はないと言っておりますが、実際は乗り心地が全然違う、別の車です。補強しているとはいえ、ボディ剛性はやはり落ちているため、それに合わせて足回りも柔らかめにセッティングされていて、タイヤも韓国のハンコック製の柔らかなタイヤを履いています。走り出すと出

だしから、柔らかな感触が感じられて、かつて乗っていたエアサスの車のように。ボディ剛性に合わせて、車の走りの剛性感も柔らかかになっています。ロードノイズも静かです。これは、これで心地良いです。街中では、自分で運転するのですが、高速などでは自動運転ができますので、かえってイライラしたりすることはなくなりました。渋滞でも、アクセルとブレーキの踏み替えをせずとも走るのですね。ずいぶんと楽ですし、自動で走ることの面白さがあります。

一応スポーティなグレードですので、標準で大きなブレーキを搭載していて、さらに、グランクーペにはオプションのブレンボ製のより強力なものに交換していますので、どちらも、ブレーキは効きすぎくらい効きますし、踏めばすごい加速をしますが（0-100km/h 4秒台）もう若くないですし、このご時世ですので、ゆっくりのんびりと走っております。

また、この車たちには、とても便利な装置がついていて、アダプティブクルーズコントロールと言うのですが、オンにしておく、3眼カメラとレーダーで道路や周囲の状況や車を監視しつつ、アクセルやブレーキ操作、ハンドル操作は自分でしなくても、前車を一定の車間距離で追従したり、車線内をキレイに走れたり、急なカーブでも手をハンドルに添えて置くだけで、自動でグイグイ曲がって行きます。自分で微妙な舵の修正をしながら運転するよりも、上手に運転してくれます。前に割り込み車があっても、さっと自動でブレーキがかかって、再びその車を一定の車間距離で、追従を始めます。これがあるので、高速道路の運転はほぼ自動なので、とても楽で、カーブや加減速の多い阪神高速なんかでは特に重宝しています。また渋滞モードに、なるとハンズフリーといって、前さえ見れば、ハンドルを握らず手放しで、自動運転されます。ただ、楽ちんすぎて、ついよそ見をしてしまったり、自分の視線が

ぶれたりして、視線を監視するセンサーに、前を見てないと、判断されてしまい、ハンドルを握るように警告されます。じっと前方を見つめていないといけないので、かえってしんどいです。将来の自動運転を見据えた技術が載せられているようです。

これらの2台の車は、車幅が1.85m、全長4.8m足らずで、日本の道路環境には、手頃な大きさと、乗りやすいです。以前乗っていた、BMWの750iは、車幅1.9m、全長約5.2m、840iグランクーペは、1.93m、5.1mと、大きくて、もて余していま

した。でも、昨今大流行りのSUVに比べると、これでもコンパクトと言えますね。

電気自動車にも、エコと言う意味でなく（実はエコでないとの話しも、使用済み電池の問題もありますが）どんな感じかなあと、乗ってみたいはありますが、充電が面倒そうなので、当面はガソリン車に乗って行こうと思っています。

今の2台は、これまでになく気に入っていて、よほど惹かれないのが出ない限り、大事に乗り続けようかと思っています。



南フランス旅行

隠れ観光スポットを中心に

宮脇 裕二（昭和55年入局）

コロナ感染症もやや下火になってきましたので、やっと念願の海外旅行に飛び出すことができました。行く先はもう行き慣れた南フランスに決めました。南フランスも、新婚旅行や神経グループで行った学会後の旅行も含めると、今回で7回目になりますが、観光先がなくなってしまったかと思いましたが、なんのなんの、行くところはまだまだいっぱいあるのです。

7月前半の南フランスはもうすでに気温が37度程度ありまして、非常に暑い状況でした。また心配事の1つとして、アルジェリア系の少年が警察官の発砲で死亡した事件をきっかけに起こった暴動がフランス各地で発生していました。そこでできるだけ治安の良い街を選んで宿泊することにしました。南フランスで1番治安の良いのはモナコでその次はカンヌになるかと思えます。そこで今回の宿泊先はカンヌに決定いたしました。カンヌを拠点として、ガイドさんの車、電車、船を利用して各地を周る事としました。パリではかなりの暴動が起こっており、ニースにも少し飛び火していました状態でしたが、実際に行ってみるとカンヌは平穏無事で、いつものセレブの街のままで

暴動の面影は一切ありませんでした。カンヌ観光で一番有名なのは映画祭の開催されるパレ デ フェスティバルエ デ コングレですが、これはスルーして、カンヌの港から船でかの有名なサントロペに向かいます。サントロペはご存知の様に非常におしゃれなセレブたちの集まる街ですが、街の中にポップアートの壁画がありました。（写真1）、同じ様なセレブの集まるモナコと比べてみると、モナコではかなりの数見かける中国人がここサントロペにはほとんどいません。そのためか落ち着いて買い物や食事をすることができました。特筆すべきはセレブ達のファッションセンスも素晴らしい事で、こんな服見たことないし、こんな服有りなの？と思うくらいの大胆な服装で街中を女性が闊歩してゆきます。つまり、サントロペでは景色を見るというよりは、ハイセンスな女性達を見に行くところと言えるでしょう。もちろん、男性のファッションも注目ですが。

次に、南フランス最大の都市マルセイユですが、ここの定番の観光スポットは小説『モンテ・クリスト伯』に出てくるイフ島のかつて牢獄であったイフ城でしょうか、これはまあ置いて、



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

マルセイユの名物料理といえばやはりブイヤベースでしょう。ブイヤベースは高級レストランで食べるのもいいのですが、地元民が足繁く通う様な小さな漁村のレストラン（Le Grand Bar des Goudes）でいただく、とれたての魚を使ったブイヤベースも素晴らしい、味はむしろこちらの方がいいかな？という感じです（写真2）。

マルセイユの市街地から少し離れたあたりの海はまさに紺碧という感じで、石灰岩の白い岩肌と色の対比がとても美しく感じられます（写真3）。

マルセイユからもう少しいったところに白ワインで有名なCASSISという街がありますが（写真4）、夏場は海水浴客で非常に混雑します。ここからカランク（入江）めぐりのクルーズ船が出ていて、以前も周遊したことあるのですが、今回も乗ってみることにしました。船の上から白い断崖に囲まれたエメラルドグリーンの海の絶景と透明度が高いため水の中を泳ぐ魚達を観察することができます

（写真5）。マルセイユから約20kmは白い岩肌の断崖ですが、カンヌから西のサン・ラファエルにかけて黄金の断崖（コルニッシュ・ドル）と呼ばれる赤い斑岩の絶壁と紺碧の海がひろがる海岸線があります。この赤い岩肌に夕陽が当たって黄金色に輝くために黄金の断崖と呼ばれるそうです（写真6）。写真が白黒なので赤い岩肌が分かりにくいですが、この黄金の断崖にはカンヌからクルーズ船が出ています。

今度は内陸部に話を移します。カンヌから北に車で山岳地帯の中に入っていきますと、背後に切り立った岩壁が迫る小さな村ムステイエ・サント・マリーにたどり着くことができます。ここでは二つの岩の間に、星をつけた227mの金色の鎖がつりさげられています。伝説によりますと十字軍遠征を終えた一人の騎士が無事にこの村に帰って来たことを感謝するためにささげられたそうです。村の中央を岩山から流れ出た小川と滝がこの



写真7



写真8



写真9



写真10

村の美しさをきわださせています（写真7）。この良質な水と土で作られる陶器（ムスティエ焼き）は非常に有名です。

ムスティエ・サント・マリーから車で少し行くとエメラルド色の水をたたえたサント・クロワ湖にたどり着くことができます。ここが「フランスのグランドキャニオン」とよばれるヴェルドン峡谷の入り口に当たります。アルプス山脈の隆起によってできた断崖絶壁で25km以上続くとされています。峡谷の水は独特のエメラルド色をしていますが、この色は水中のフッ素濃度が高いため緑色をしているとの事です。夏の時期は多くの観光客で溢れてますが、カヌーや足漕ぎボートを使って峡谷内を遊覧して（写真8）、峡谷の岩肌を間近にみるすることができます。実際に峡谷内をボートで進んで切り立った白い岩肌をすぐ近くで垣間見ることをおすすめします（写真9）。夏に足漕ぎボートで行くのはかなり暑いので、冷たい水を持っ

て行くことをおすすめします。

最後にフランスの革命記念日カンヌで大きな花火大会が開催されます。毎年一つの国が花火ショーを企画します。日本と全く異なるのは、まず企画国の国歌が流れ、続いてフランス国家が流れて花火が開始となります。海に出た船から花火が打ち上げられますので浜辺のサンデッキに寝転び、シャンパン片手に花火鑑賞てな具合です（写真10）。私がカンヌを訪れる理由の一つでもあります。

以上定番の観光スポットを回る以外に、これらのところもコートダジュール観光に加えていただくと良いと思います。

今年の夏もまたコートダジュールに行ってしまうそうです。美味しい食事とロゼワイン、紺碧の海、日本で見かけないセレブ達のファッション、花火など、どれも魅力的です。



編集後記

新年、あけましておめでとうございます。昨年は特にスポーツ面で躍進した年であったと思います。3月のワールドベースボールクラシックでの侍ジャパンの優勝、サッカーワールドカップでの日本チームの検討、ラグビーもよく頑張りました。そして、ついに阪神タイガースが『アレ』を達成し、その勢いのまま『アレのアレ』も達成してしまいました。私のところのクリニックの周りは大変で、特に日本シリーズの甲子園球場は尋常でなく、例えるならば球場自体が上向きに設置された大スピーカーといった具合でしょうか。

巻頭言で西澤会長が書かれていましたように、市整会もこれから新しい世代にバトンタッチしていく必要があります。阪神ファンでいえば、掛布、バース、岡田のバックスクリーン3連発に浸っているような世代から、近本、森下を応援する

ような世代に代わる必要があるということでしょう。

今回、4年ぶりに執り行われた家族会の楽しい雰囲気の記事、黒田先生には大変読み応えのある大作をいただきましたし、天野先生からは2編、坂本先生、竹中先生、鱧永先生からも興味深い記事をいただき、古瀬先生におきましては大変な目に遭われた経験を切実に綴っていただきましたので、大変充実した会報を作ることができました。これからは皆様のご投稿をお待ち致しております。

本来は50周年記念誌に掲載されるべき豊川先生の『ワクチン接種奮闘記』を今回の会報に掲載させていただきましたので、記念誌と共に保存いただきますようお願い申し上げます。

広報 宮脇裕二